

## 開学の頃

著者	一ノ関 昇允
雑誌名	新潟県立看護短期大学紀要
巻	9
ページ	43-44
発行年	2004-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10631/571">http://hdl.handle.net/10631/571</a>

## 開学の頃

初代事務局長 一ノ関 昇 允

10年前の4月不安と希望が相半ばしながら、看護短大に赴任した。県行政の中で学校事務は、県立高校と女子短大があり、事務局職員が配置されている。その経験がない私が事務局長の職責を全うできるのかという戸惑いがあり、反面では以前の上越勤務の経験を生かして何とかやれるだろう、未経験分野に挑戦してみようという思いもあった。

新設校の常として、教授始め諸先生と事務局職員は、ほとんど初対面である。各地から赴任した先生方は、それぞれ立派な経歴と実績の持ち主であり、それに比べると事務局職員は、県内の勤務経験だけで、当初私を含めてやや力不足かな、先生方とのコミュニケーションを上手にできるだろうかと思ったが、県当局も抜かりなく優秀な職員を配置しているのが次第に分かってきて、少しは肩の荷がおりたのである。

私が心がけ、職員にも徹底させようとしたのは、学校運営は、先生が主役であり、事務局はあくまで黒子役であるという点であった。学長を頂点とする学科長以下の諸先生は、看護・医療・保健人材の育成という使命があり、それを事務的にサポートするのが事務局職員の本分であるということは、誰もが観念的には理解できる。しかし、それまで一般行政の職場にいた私達にはなかなか実行が伴わず、それに気が付くたびに反省する羽目となった。

私の看護短大での2年間の役割は、事務局体制を確かなものにし、先生方と協力しながら学校運営を軌道にのせることであったが、振り返ってみてその役割を果たすことができたかどうか、忸怩たる思いにかられる。

以下、2年間の中で印象に残っている事項を書き記して見たい。

### 入学式

4月中旬初めての入学式に臨んだ。1期生百人が参列し、平山知事等の来賓祝辞のあと斉藤学長の訓示が行われ、学生代表の宣誓の順に式が進んでいく。式場左側に整列した先生方は、1期生への期待とともに、これから本格化する授業への思いを胸に秘めている

ようで、表情は誇らしげで輝いて見えた。事務局職員の私ですら、これから看護短大の歴史が始まるという思いで、胸が熱くなるような感じであったが、先生方には感激に満ちた式典であったと思う。

式終了後会場を換えて行われた開学祝賀会では、来賓各位が先生方を励ましていたが、とりわけ平山知事さんが、気さくに先生方に声をかけ励ましていたのが、印象に残っており、知事の看護・医療人材の育成にかける姿勢が感じられた。

### 校章・校歌の制定

初年度の予算の中に、校章と校歌の経費がなかった。校章等は開学初年度に製作すべきもので、2年目以降では気が抜けたビールのようなものとなる。斉藤学長の了解を得て県に相談すると、すんなりと予算を認めてもらったが、製作手法が難しかった。学生の作品を含めた公募は、かなりの期間を要し、経費も相当なものになるため、上越地域の専門業者がデザインした数点の中から選択する方法を取り、学生と教官で構成する選定委員会で、校章を決定したのである。

校歌は、歌詞を製作した上で、そのイメージにふさわしい作曲をする。歌詞製作者を誰にするかについて、教官の間で議論が交わされた結果上越市在住の杉みきさんをお願いすることになり、作曲を上越教育大学の後藤 丹教授に委託することになった。校歌が完成したのは、2月頃と記憶しているが、4月の入学式で2年生が歌うため、その後体育館で学生が特訓指導をうけていたのを鮮明に記憶している。

### 諸先生の記憶

先生方とは、開学時に初めてお会いした。初めは意見が合わないこともあり、私の至らなさを痛感したこともあったが、お互いの胸のうちが分かるにつれて、学校運営も円滑に回り始め、良好な人間関係を保てるようになった。斉藤学長とは執務室が隣で、頻繁に行き来させてもらい、教育方針や学校運営についてお話しいただき、教訓や指導をしていただいた。また、お互いに単身赴任であったことから、私的にもお付き合い

させていただき、2年間公私にわたりお世話になり感謝していたところ、任期終了直前に逝去され、大変残念に思っております。

桑野先生、加藤先生、小野沢先生、田中先生、長野先生、山本先生等県外から赴任された方々は、慣れない雪国生活で、大変苦勞されておられました。新潟県の看護・医療等の人材の育成に尽力されていることに心から感謝を申し上げます。

杉田先生、中野先生、関谷先生には、それぞれの専門分野で、人材育成にご努力いただいたことと併せて、研究分野で功績を上げておられることに敬意を表すものであります。

終わりにあたり、看護短大は10年間で幕を閉じましたが、発展的解消を遂げ、看護大学にこれまでの成果が引き継がれました。より質の高い看護・医療等の人材育成を目指す看護大学の礎には、短大時代に培った建学精神や実績がしっかりと注入されているものと信じております。今日に至るまでの諸先生、事務局職員の尽力に敬意を表しながら筆をおきます。

(新潟県町村人事組合)